話し言葉の男女差 一定義・意識・実際一

聖心女子大学助教授

小川早百合

はじめに

本研究は留学生に対する日本語教育の立場から行なっている。ある程度の期間日本語を学び、日本語力がついてきた学習者からは、周囲の日本人が、男女によって話している言葉が異なることがあるということに気づく。そして、学習者自身も自分の性別に適した言葉を学びたいという要望が出てくる。一方、日本語学習者は強く意識していないかもしれないが、周囲の日本語話者にとってみると不適切は「男言葉」「女言葉」は、不快なものになる¹。

そこで、学習者、および学習者の周囲の両方にとって心地よいコミュニケーションのために、男女差のある話し言葉をどうやって教えたらいいかを研究し始めた²。

この研究のきっかけを与えてくれた学習者が、大学生であったので、大学生の世代の話し言葉には、どんな男女差があるのかをまず調べた。男女差はあまりないのではないか、という予想のもとに調査を始めたが、その過程で、研究書に述べられている男女差と実際に使用されている言葉には、かなりの隔りがある、ということに確信が持てるようになった。そこで、研究者・辞書の定義する男女差（定義）、一般の人が描いている男女差（意識）、実際の使用場面に表れる男女差（実際）、この3つの観点の男女差の隔りを考察することを本研究の目的とする。そして、言葉の男女差を日本語教育でどう扱っていくのかという問題への1つの回答を出してみたい。

1. 男女差の定義

1. - 1. 研究者による説明

従来、さまざまな研究者による日本語における男女差を示す要素は³、

- ① 終助詞（文末表現）
- ② 呼称（1人称、2人称、3人称）
- ③ 音変化（促音化・長音化・音便化）
- ④ イントネーション
- ⑤ 語彙（副詞、「お」、～じゃん・奴・食う……）

- ⑥ 文法 (主語の欠如、格助詞の欠如・体言止め)
- ⑦ 敬語 (ていねいさ)
- ⑧ パラ言語
- ⑨ 聞き手の性別 (社会的地位)
- ⑩ その他 (呼びかけ、言いよどみ、繰り返しの表現 etc)

が主なものとしてあげられる。

しかし、一方では、現代の日本語には男女差はないという研究者もあり、「言葉遣いの性差を言うこと自体、古くさい」⁴ と言
い切る場合もある。

表 1 男女の使用差がある終助詞

終助詞	辞書			書		
	小学辞書 初大辞典 1981	新明解国語 辞典第三版 1981	A Dictionary of Japanese Grammar 1986	広辞苑 第四版 1995	新明解国語 辞典第五版 1997	広辞苑 第五版 1998
ぜ						
い						
な						
よ						
ぞ						
さ						
かい						
だい						
か						
のか						
のお						
や						
ろ						
もんか						
だ						
かな						
かね						
かよ						
つけ						
なよ						
ね						
のかな						
のね						
のよね						
よな						
よね						
わね						
い						
たら						
よ*						
わよ						
のよ						
の						
こと***						
てよ						
て						
かしら						
わ						

1. - 2. 辞書の説明

上記の研究者による説明のうち、①の終助詞、②の呼称(そのうち代名詞)について、辞書での説明をみると、以下のようになる。

1. - 2. - ①終助詞 (表 1)

終助詞のうち、女性語と記述してある辞書数の多い順に並べると、

わ、かしら、て、てよ、こと、の、
のよ、わよ、よ、たら、い

となり、同様に男性語として多い順に並べると、

ぜ、い、な、よ、ぞ、さ、かい、だ
い

となる。「女性語」とされるものの方が「男性語」よりやや多い⁵。ここで典型的な女性語はわ、かしら、男性語はぜ、い⁶などである。

* だ・た・な・動詞終止形・ない+ よ

** 名詞+ よ

*** 文末にそえて、終助詞的に用いる

1. - 2. - ②呼称 (表 2)

呼称については、辞書で確認できる代名詞に限った。男性語という扱われるものの方が女性語より多い。また相対的に1人称を示すものに男女差が多い。

女性1人称：あたし

2人称：あなた (妻から夫の対する場合)

男性1人称：おれ、わし、あっし、ぼく

2人称：きみ、おまえ

表 2 男女の使用差がある呼称

人称	呼称	男性語		女性語	
		小学館 国語大辞典1961	新明解国語辞典 第五版 1997	広辞苑 第五版 1998	
1	おれ 己・俺				
1	わし 私				
1	わたくし 私				
1	わたし 私				
1	あっし 私				
1	あたし 私				
1	ぼく 僕				
2	おまえ 御前				
2	あなた 貴方				
2	あんた				
2	きみ 君				
2	こいつ 此奴				
3	あいつ 彼奴				
3	あやつ 彼奴				
3	やつ 奴				
3	きやつ 彼奴				
3	そいつ 其奴				
3	そやつ 其奴				

*ここでは、妻が夫を呼ぶ場合の「貴方」を女性の使用語としている。

2. 男女差として意識されるもの

2. - 1. 意識調査 (以前の研究より抜粋) ⁷

1996-8年、首都圏と近畿圏在住の大学生435名(女性287名、男性148名)を対象に、話し言葉の男女差についてのアンケート調査を行なった。そのうち、

- a. 日本語の話し言葉には男女の違いがあると思いますか。
- b. 日本語の話し言葉に男女の違いがあるとする、どのような場面・表現・言葉遣いなどにあらわれていると思いますか。

の2つの質問に対する回答(自由記述)について抜粋する。

- a. の質問の男女差については、あると答えた人57.2%、ない32.9%、その他9.9%

であった⁸。

b. の男女差がどこに表れるかという質問に対しては、言語上の特徴をあげた人 269 名 (61.8%)、場面を回答した人 110 名 (25%)、印象でとらえた人 90 名 (20%)、(重複回答) であった。

2. - 1. - 1. 意識調査と研究者の説明との比較

男女差として言語上の特徴をあげたものの具体的記述 (269 名、950 例) を分類し、記述数の多い順に並べると、

① 終助詞 413 例(43.5%)、② 呼称 223 例(23.5%)、③ 語彙 123 例(12.9%)、④ その他 52 例(5.5%)、⑤ 敬語 43 例(4.5%)、⑥ パラ言語 39 例(4.1%)、⑦ イントネーション 32 例(3.4%)、⑧ 音変化 19 例(2%)、⑨ 文法 6 例(0.6%)となる。これらは従来の研究者による説明をほぼ網羅するのもであり、研究者の説明と人の意識とには大きな差はない。

2. - 1. - 2. 意識調査と辞書の定義との比較

2. - 1. - 2. ① 終助詞

終助詞を含む文末表現は、142 名 (32.6%) が上げており、複数回答の記載例を数の多い順に並べてみる (表 3)

表 3

女性らしさ (220例)	ね(44)、よ(27)、でしょ(21)、だね なの よね の だよね ねえ、 かしら、なのよ、ね かな、だもん、だよ(各3)、のよ(1)
男性らしさ (159例)	だろ(30)、よ(15)、な(14)、だぜ、ぜ、だよ(各9)、だ、か、だよな、ぞ、 だぞ、や、かよ、よな、さ(各1)

辞書の説明での女性語と比較すると、(アンケートの方は、終助詞以外の文末表現も含んでいるために必ずしも正確な比較ではないが、) 数の多少に関わらず一致しているものとしては、わ、かしら、よ、のよである。辞書で説明されていた「て」「てよ」「こと」「わよ」などは、現代の日常の語彙とはかけ離れた存在になっているためか、女性語として意識されないようである。

男性語も同様に比較すると、辞書と意識が一致するのは、ぜ、な、よ、か、や、

だとなる。

アンケートでは、最も多くの人々が記述した女性の「ね」は、辞書では女性語として扱われておらず、男性の「だろ」は、それ自体が辞書の見出し語にはない。さらに、自由記述の中には、「男性の『だぜ』、女性の『よ』『だわ』は使われなくなっている」、「典型的な女性の言葉『わ』使われていない」、「テレビでよく『だわ』を耳にするが、実際にはほとんど言っていない」などの記述もあった。

2. - 1. - 2. ② 呼称

呼称に関しては 93 名(21.4%)が具体例を挙げている。複数回答を多いものから順に並べてみると、女性らしさはほとんどが 1 人称と 3 人称を挙げたものであるのに対し、男性らしさは 1 人称と 2 人称が多かった。(表 4)

表 4

女性らしさ (87 例)	私(42)*、あたし(7)、名前・ニックネーム(6)、あの人/この人(6)、あなた(4) 等
男性らしさ (136 例)	おれ(45)、ぼく(32)、おまえ(29)、そいつ/こいつ/あいつ(13) 等

*回答は記述式であったため「私」と表記されたものは、「わたし」「わたくし」の区別がつかない。

辞書の説明と意識とが一致しているのは、女性 1 人称のあたし、2 人称のあなた、男性 1 人称のおれ、ぼく、2 人称のおまえで、辞書と意識はよく一致している。

2. - 2. 男女差が生じる場面として意識されるもの

言葉の男女差の表れについて、場面を意識した記述例 (110 名、110 例) を示す。

表 5

対人場面 (40 例)	異性間(8)、目上/年上(8)、親しい人(7)、年下/同等(3)、親(3)、初対面(2)、あまり親しくない人(2)、恋人(2)、子供(2)、
機能場面 (27 例)	同意を求める時(4)、きちんとした話し方をしたい時(2)、自分の性を誇張したい時(2)、命令する時、相手を呼ぶ時、テーマに沿った話し合いをする時
感情表現場面 (27 例)	怒った時(12)、感情が高ぶった時(8)、驚いた時、奇声をあげる時
具体的場面 (16 例)	けんかの場面(9)、普段(3)

対人場面が最も多いが、「目上/年上」「年下/同等」、「親しい人」「あまり親しくない人」、「初対面の人」「親しい人」、「異性間」「同性間」、「けんか」「普段」などとの相反する場面が挙げられているのが特徴的である。しかし、異性間の場合、女性はより女性らしい言葉を使うのか、あるいは逆にざわと男性らしい言葉を選択するのか、などは不明である。呼称の使用についてはくだけた場面で、女性はより男性に近い表現で、男性はより男性らしくと、逆に女性の表現に近づく傾向の二極化が見られた。

2. - 3. マスメディアにおける男女差の意識

人の意識に影響するものに、教育とマスメディアがあげられる。そこで、マスメディアが話し言葉の男女差をどう扱っているかを確認しておきたい。

古くは、昭和 13 (1938) 年 8 月 8 日付の東京朝日新聞：

女子学生の言葉が悪くなったのもこの二十年来の事です。……

丁度日露戦争前明治 35、6 年頃の女子学生は友達同志でさえこう遊ばせ、あゝ遊ばせの遊ばせ言葉でしたが、大正初年以後女学生間にもスポーツが非常な勢いで普及した結果、女の態度が活発になったのはよろしいが、男の真似をすることがよいとされ、すべての女性が男性化の傾向を取ると言った露悪趣味の時代がありました。

女性は女性の言葉を使うことを是とする意識が見られる。

近年では、1998年1月に中学校の英語教師が生徒に刺されて亡くなった事件の報道記事には「先生は『ちょっと来な』と、男言葉で生徒と友人の二人を廊下に呼んだ」とあった。「男言葉」を使ったことが事件の原因になったことを示唆するような書き方であり、女性の「男言葉」使用をマイナスのイメージで評価する姿勢が伺えるものではないだろうか。

出版の場合でみると、2001年4月刊行の伊集院静『母の男言葉』という著作に、「母は笑いながらわざと男言葉を使って、私を慰めようとした。『いろいろあらあな』⁹とある。この著作は週刊誌の連載をまとめたものであるが、「母の男言葉」と題した回のタイトルを著作のタイトルとして採用し、さらに本の帯にもこの文章引用している。女性、それも母が「男言葉」を使用するのは特殊なことだと意識した上で上手に注目を引いた本作りではないだろうか。

3. 男女の使い方の違い実際 (以前の研究より抜粋)¹⁰

3. ①終助詞

1996年に首都圏の大学生127名に親しい者同士の会話を録音してそれを文字化してもらった。その中から、条件にあった51組、129名、(女性65名、男性64名)、666の発話(女性330、男性336)を採用し、終助詞を使っている文を取り出し、男女別の使用状況を調査した。(表6)

ここで使われた終助詞を使用頻度の高い順に並べると、以下のようになる。

女性の使用	①よ95 ②の 78 ③ね 61 ④よね 35 ⑤かな 17
	⑥のよ 12 ⑦さ 10 ⑧な 5 ⑨のね 4 ⑩わ 3
	⑪かね・なよ・のよね・わよ 2 ⑫のかな・や 1 (回)
男性の使用	①よ 105 ②の 65 ③な43 ④ね 33 ⑤よな・よね 17
	⑦かな 12 ⑧ぞ11 ⑨ぜ 10 ⑩さ 7 ⑪か 4
	⑫かよ・なよ・のかな・や・わ 2 ⑬かい・わね 1 (回)

表6 終助詞の使用の男女別集計

終助詞	合計	f	m	例
か	4	0	4	m: マックでも行くか
かい	1	0	1	m: ありきたってるかい?
かな	38	29	12	f: 2ヶ月くらいかな m: まずいかな
かね	2	2	0	f: なんかね
かよ	2	0	2	m: 俺かよ?
さ	17	10	7	f: 髪まとまなくてさ m: いないからさ
ぜ	10	0	10	m: もう終わりにしようぜ
ぞ	11	0	11	m: がまんするぞ
な	52	48	43	f 0 f: めずらしいな 行きたくないな ml 2 m: 電話してみな またな
なよ	4	2	2	f 2 f: 履きなよ 話とおなよ ml 2 m: してあげなよ 一緒にすんなよ
ね	94	61	33	f: 考えとくね またね m: 行けないね たぶんね f: いいんじゃないの f: 危ないの?
の	143	78	65	fQ 38 m: 静岡の人はいないの? m: なにぜいたく言ってるの f: 帰ってきてるのかなあ
のかな	164	3	2	m: 提出していいのかな
のね	4	4	0	f: 送られてきたのね
のよ	12	12	0	f: こわいのよ
のよね	2	2	0	f: ゆるいところがあるのよね
や	3	1	2	f: 車内検札じゃないや m: どっか行こうや 会おうや
よ	200	95	105	f: こっちのかごの中よ バイトだよ m: 本当だよ 返事するよ
よな	269	17	17	m: よく働くよな 5月病だよな
よね	52	35	17	f: 面白いよね きらいだよな m: いないんだよね 言ってたよね
わ	5	3	2	f: 電話してみるわ うらやましいわ m: 頭痛がするわ
わね	8	1	1	m: えらいわね
わよ	2	2	0	f: 楽しくやってるわよ
総計	666	330	336	

fは「女性による表現」、mは「男性による表現」。
Qは「疑問文」、|は「命令文(禁止形を含む)」。

〈出典:小川,1997,pp.206-7〉

の2終助詞だけである。一方、意識との比較では、**ね、よね、の、かな、のよ**が、一致している。日常的な意識は実際の使用と比較的近い。男性語は、辞書と一致するものが、**ぜ、な、よ、ぞ、さ**、意識とは1つでも一致があるものは、**よ、な、ぜ、ぞ、よな**である。男性語の方は、辞書の説明、意識ともに、実際の使用と一致する者が多い。

3. ②呼称

呼称の使用については、1996-8年の3年間に大学生241名に依頼し、現代の若者の男女の日常会話を3分間録音してもらい、そこから、女性352名、男性296名の発話の中の呼称の使用例数を取り出して、集計した(表7)。その結果を辞書の説明と比較すると、

女性1人称：**あたし**、

男性1人称：**おれ、ぼく** 2人称：**おまえ**

が、一致しているものである。また意識調査との比較では、

女性1人称：**私、あたし**

男性1人称：**おれ、ぼく** 2人称：**おまえ**

となり、ここでは、特に男性の意識、辞書の説明の両方に一致点が多くみられる。特に男性の用法と意識とに一致点が多くみられる。しかし、辞書の説明も、終助詞に比べれば、おおむね現実の用法に即している。

表7 呼称使用に関する実態調査

	女性による使用(総数352)		男性による使用(総数364)		例数	%
	呼び方	例数	%	呼び方		
一人称	わたし	108	30.7	おれ	142	39.0
	あたし	33	9.4	ぼく	14	3.9
	うち	18	5.1	うち	9	2.5
	自分	5	1.4	自分	6	1.7
	おれ	3	0.9	わたし	2	0.5
	ぼく	1	0.3	おれさま	1	0.3
	名前/ニックネーム(NN)	10	2.8	名前	9	2.5
二人称	あんた	14	4.0	おまえ	55	15.1
	おまえ	10	2.8	あんた	6	1.7
	あなた	2	0.6	きみ	2	0.5
	自分	6	1.7	おたく	2	0.5
	きみ	3	0.9	自分	2	0.5
	そっち	2	0.6	あなた	1	0.3
	苗字	2	0.6	そっち	1	0.3
	(苗字)くん	16	4.5	苗字	7	1.9
	(苗字)さん	5	1.4	(苗字)くん	8	2.2
	名前/ニックネーム	9	2.6	(苗字)さん	3	0.8
	(名前/NN) ちゃん/さん/くん	23	6.5	(苗字)ちゃん	3	0.8
	(～)先輩	4	1.1	名前/ニックネーム	13	3.6
				(名前/NN) ちゃん/さん/くん	4	1.1
			(～)先輩	4	1.1	
三人称	こいつ/あいつ	5	1.4	こいつ/あいつ	15	4.1
	(その/あの)こ	7	2.0	(～)やつ	10	2.7
	(その/あの)ひと	7	2.0	(その/あの)こ	2	0.5
	彼/彼女	7	2.0	(その/あの)ひと	3	0.8
	(～)やつ	2	0.6	彼/彼女	3	0.8
	苗字	1	0.3	苗字	5	1.4
	(苗字)くん	13	3.7	(苗字)くん	8	2.2
	(苗字)さん	7	2.0	(苗字)さん	6	1.7
	名前/ニックネーム	13	3.7	名前/ニックネーム	9	2.5
	(名前/NN) ちゃん/さん/くん	12	3.4	(名前/NN) ちゃん/さん/くん	5	1.4
	(～)先輩	4	1.1	(～)先輩	4	1.1

〈出典:安田他,1999,p81〉

4. 考察 - 3 観点の差異について -

話し言葉の実際の用法には、男女差がある。それは、辞書で説明できる範囲から終助詞や呼称を取り出してみれば、実際の用法と辞書の説明(定義)は異なりが大きく、また若者の男女差の意識と辞書の説明(定義)も一致していないものが多い。男女差として意識されている事項は、実際の用法を反映している点が多い。

話し言葉の男女差は、依然として存在しているといえる。しかし、上記アンケートでは32.9%が男女差がないと回答している。中には男女差がないとしながらも、男女差の言葉の例を記入するものもある。それは、知識や経験で知っている男女差や辞書の定義であったりする。「ない」との回答は、男女差が少なくなっているということや「なくなりつつある」という意味で「ない」と答えたのではないかという類推もできる。実際に回答にあった「典型的な女性の言葉『わ』使われていない」という記述に代表されるように、もっとも典型的と考えられていた終助詞が使われていないということも、男女差が「ない」と感じさせる大きな要因と考える。

5. 終わりに - 日本語教育で話し言葉の男女差をどう教えるか -

日本語教育で話し言葉の男女差をどう教えるかという最初の問題であるが、どう教えるかの前に、教えるべきものかという疑問の解決が必要である。世界のどの言語にも話し言葉には多少の男女差が存在していると言われる。ただ日本語の場合を考えてみると、その歴史は明治以後のものであり、社会環境として、女性の話し言葉が相手にされていなかった状況¹¹があったことなどから、男女差を喜んで教えるわけにはいかないような気がする。しかし現実には、男女で使い分けが行われていたり、誤った使い方では、相手が不愉快な気持ちを引き起こしかねない。

そこで、以下のように考えてみたい。

1. 上級以上の学習者には、男女差があるという事実は、必要な知識として教える。
2. 男女差を知り、自分に相応しい使い方を習得するのは、politenessの観点で必要だという認識をする。
3. 具体的な用法を知るには、辞書や研究書類に頼らず、コミュニケーションを取りたい日本語母語話者あるいはその集団の話し方に注意して耳を傾け、自ら特徴をつかみとってみる(母語習得と同じやり方)。

これをふまえた上で、教師は、学習者を支援する立場で、自らの男女差についての知識・意識を提供したり、統計調査結果を提供する。

【注】

1. 終助詞は話してと聞き手の関係を前提として使われこと、誤った使い方は相手に不快な気持ちを起こさせかねないこと、終助詞を間違えるとひどく気になる、と上野 (1972, p62) にある。
2. 従来の研究としては、「デス・マス体」指導の問題点について山下秀雄(1989)に的確に述べられている。また日本語の教科書としては、“Modern Japanese for University Students”(1963-68)が、男女の話し方の違いを示した先駆的なものである。インフォーマルな会話を提示する理由などについては、小出 (1972, p261) に説明。拙研究は、小川 (1997)、安田他 (1999) に掲載。
3. 参照した文献は、国研 (1951)、上野(1972)、田中 (1973)、杉本 (1975)、寿岳 (1979)、井出 (1983)、Makino Seichi & Tsutsui Michio (1986)、堀井 (1990)、益岡・田窪 (1992)。
4. 遠藤織枝「毎日新聞」2002年9月4日
5. 研究者の説明では男性語の方が多い。また「男性や高年の女性が使う語」というくり方もある。
6. 「い」は、「かい」「だい」なども含めて、命令・疑問・断定など文の終りに付いて語勢を強める。例：早くしろい、何だい、食べるかい、うそだい
7. 安田他 (1999) pp.73-90より抜粋。
8. 国立国語研究所の調査が1974-5年に行なった調査では、(国立国語研究所1981a,1981b) では、男女差について若年層 (15-24歳) の回答で、ある62.4%、ない35.5%、その他2.1%。1974-5年と、1999年の20年間の変化はほとんどないといえる。
9. 『週刊文春』1999.10.28-2000.12.28 号に連載された際には、「二日酔い主義」というタイトルであった。
10. 小川 (1997) pp. 205-220.
11. 明治時代に、話し言葉の男女差が確立されていったが、当時の社会背景と無関係ではないと思われる。明治時代に話し方の指導方法の開発について先進的な研究を発表した横山健三郎は、「実際多く用ひざる話し方は、練習する必要なし。例へば、女兒に討議せしめるが如き之なり」(横山健三郎『話方教授之枝折』、増田信一『音声言語教育実践史研究』より引用)と述べ、女性の話し言葉は取るに値しないものという価値観があったことが伺える。

【参考文献】

- 井出祥子 (1983), 「女性の話しことば」, 『話しことばの表現』(水谷修編), 筑摩書房
- 上野田鶴子 (1972), 「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』, 17号
- 小川早百合 (1997), 「現代の若者会話における文末表現の男女差」, 『日本語教育論文集』, 凡人社
- 小出詞子 (1972), 「日本語教育について」(文化庁編)『日本語教授法の諸問題』
- 国立国語研究所 (1951), 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 国立国語研究所 (1981a), 『大都市の言語生活—分析編—』, 三省堂
- 国立国語研究所 (1981b), 『大都市の言語生活—資料編—』, 三省堂
- 寿岳章子 (1979), 『日本語と女』, 岩波書店
- 杉本つとむ (1975), 『女のことば誌』, 雄山閣出版
- 田中章夫 (1973), 「終助詞と間投助詞」, 『品詞別日本文法講座9 助詞』(鈴木一彦・林巳樹編), 明治書院
- 堀井令以知 (1990), 『女の言葉』明治書院
- Makino Seiichi & Tsutsui Michio (1986), *A Dictionary of Basic Japanese Grammar The Japan Times*
- 益岡隆志・田窪行則 (1992), 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 増田信一 (1994) 『音声言語教育実践史研究』学芸図書
- 水谷信子 (1989), 「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69号
- 安田芳子・小川早百合・品川なぎさ (1999), 「現代日本語における男女差の現れと日本語教育—意識・実態調査—」『小出記念日本語教育研究会論文集7』
- 山下秀雄 (1989) 「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育』69号